

氏名	ナカ ムラ ミ ア 中 村 美 亜
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	論博音第9号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉生き抜くための音楽実践 －芸術・文化・ケアを斬り結ぶ社会学的考察
学力審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 毛利 嘉 孝
（副査）	〃 教授（〃） 熊 倉 純 子
	〃 准教授（〃） 市 村 作 知 雄
	〃 〃（〃） 丸 井 淳 史
	〃 教授（〃） 檜 山 哲 彦
	東 京 大 学 教 授（大学院総合文化研究科） 長 木 誠 司
論文審査委員	
（主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 毛利 嘉 孝
（副査）	〃 教授（〃） 熊 倉 純 子
	〃 准教授（〃） 市 村 作 知 雄
	〃 〃（〃） 丸 井 淳 史
	〃 教授（〃） 檜 山 哲 彦
	東 京 大 学 教 授（大学院総合文化研究科） 長 木 誠 司

（論文内容の要旨）

本研究の目的は、音楽をモノとしてだけでなく、音楽をするコト、そして、それをとりまくシステムに着目することで、音楽が古来よりもっていた生き抜くためのアート（仕業）としての「音楽の力」への認識を新たにし、その力を発動させるためのメカニズムの一端を詳らかにすることである。具体的には、21世紀に入って展開した新たな音楽社会学のアプローチと、文化やコミュニティとの関わりに目を向けた音楽療法研究を立脚点に事例検討と理論的考察をおこない、「音楽の力」と言われるものの実体やそれが発動するプロセスについての理解を深めていく。とくに本論文が着目するのは、音楽のパフォーマティヴ（行動遂行的）な特質と身体的な記憶、そして音楽の「語りなおし」という側面である。

論文全体は三部構成で、第一部がイントロダクション（第1章）と先行研究レビュー（第2章）、第二部が二つの事例検討（第3・4章）と考察（第5章）、第三部が補論（第6章）と全体の結論（第7章）から成っている。

まず第1章で本研究の射程について詳述した後、第2章で近年注目されている「ミュージッキング」に焦点をあて、その意義や問題点を検討する。この概念は音楽をするという行為のもつ意味、またそれがもつ儀式的な側面に光をあてた点で特著される一方、音楽の再現が新たな意味を生み出す可能性、つまり音楽のパフォーマティヴな特質についての考察が十分におこなわれていないという点に問題がある。

そこで次の二章で、これらの点に留意しながら事例を検討する。第3章では、セクシュアル・マイノリティの音楽フェスティバル“Prelude”を、続く第4章では、「HIVを持っている人も、そうじゃない人も、ぼくらはもう生きている」をキャッチフレーズに開かれるクラブ・イベント“Living Together Lounge”を取り上げる。Preludeからは、音楽に共同で新しい意味づけをおこなうことによって、従来とは異なる

公共圏がパフォーマティブに現出されること、一方、Living Together Loungeからは、音楽が儀式的なフレームワークの中で演奏されるというよりも、むしろ儀式的フレームワークと一体となって参加者の身体に作用することが浮き彫りになる。形はやや異なるが、どちらの例からも、音楽を自分たちの方法で「語りなおす」ことがコミュニティ・ケアや漸進的な社会変容へとつながっているのが示唆される。

これを受けて第5章では、音楽をすることと知覚・認識・記憶の関係を、社会心理学の認知学の研究を参照しながら検討し、それが語りなおしや生きる力と結びつくプロセスを探っていく。音楽の社会機能分析を身体の議論へと進め、音楽文化を再定義することで、音楽のパフォーマティブな特質とそれを実現させる仕掛けの重要性、さらには、それを記憶にとどめるメモリーワークのケア的効果が明らかになってくる。

しかし、今日社会一般では、音楽は人間が生きるための一方法というよりも、鑑賞や娯楽の対象として認識されている。そこで第6章では、これまでの議論を踏まえながら、近代以降の音楽と芸術の関係を歴史社会的な方法で俯瞰し、その問題点を指摘する。そして最後の第7章で、音楽をモノとしてだけでなく、人間の営みというコトとしても捉えなおす観点から、音楽の価値とコミュニケーションに関わる問題を整理し、全体を総括する。

本研究を通じて示されるのは、音楽はパフォーマティブに意味を獲得するからこそ、それにどのようなフレームワークを施していくかがその効果を左右するという点である。とりわけ本研究から「音楽の力」を発動させる重要な契機として新たに示唆されたのは、①コンサートや儀式というフレームワークづくりも含めた芸術的共同作業を通じて、音楽の語りなおしをおこなうことで、新しい共有の価値体系をパフォーマティブに現出させるのが可能になること、また、②音楽というパフォーマンスを通して語りなおしの体験を共有し、それを音楽に結晶化させながら身体化していくこと（メモリーワーク）で、生きる力を得る一つのリソースを身体内に獲得することが可能になるといくことである。

生き抜くための音楽実践というのは、技や仕掛けを用いてコミュニケーションを成就させようと創意工夫することであり（芸術）、儀式的なフレームワークを通じてそれに関わる人々の生を讃えようとすることであり（ケア）、この一連のプロセスをメモリーワークとして身体化・記憶化させていくことである（文化）。逆に言えば、このように芸術・ケア・文化が斬り結ばれた時、音楽は、人の生や環境を改善するアートとして、生きる力を獲得するためのケアとして、生き抜くための方法となっていくのである。

#### （学力審査結果の要旨）

学位審査申請者である中村美亜は、現在本学音楽研究科リサーチセンター助教として勤務する研究者であり、音楽学、音楽社会学、ジェンダー／セクシュアリティ研究を専門としている。今回論文博士申請にあたって論文審査に先立ち、提出資格を満たすかどうかの学力審査を行った。

申請者は、1993年に本学音楽学部楽理科を卒業後、音楽研究科修士課程音楽学専攻に入学した。修士課程在学中にアメリカ、コーネル大学に留学、その後ミシガン大学修士課程音楽専攻に入学し、1997年に音楽学修士を取得した（本学は留学中に退学）。その後、セントルイス、ワシントン大学博士課程音楽学専攻に入学、2001年に単位取得退学後、The Institute for Advanced Study of Human Sexuality大学院に入学MA（2002年）、Ph.D（2004年）を取得している。

帰国後は、本学助手、助教以外にもお茶の水女子大学、明治学院大学、日本大学、立教大学、津田塾大学などで非常勤講師として教育活動に携わる一方で、文化社会学、音楽学、ジェンダー／セクシュアリティ研究の領域で精力的に論文、著作を発表している。とりわけ、2008年に出版された単著『クィア・セクソロジー』（インパクト出版会）は、日本におけるジェンダー／セクシュアリティ研究、文化社会学の中では必読文献として広く読まれ、その後の研究にも大きな影響を与えた。英米圏の最新の文化理論に精通しながらも、実際にフィールドワークを中心とした粘り強い実証研究を行っている点にその研究

の特徴がある。また、発表論文には三本の英語論文が含まれており、近年は国際学会でも幅広く活躍している。

以上のとおり、これまでの研究教育歴、発表論文・著作、そして提出論文概要を検討した上で、申請者が論文博士の学位申請に相応しい学力を有することを全員一致で確認した。

(総合審査結果の要旨)

中村美亜の論文博士申請論文『生き抜くための音楽実践－芸術・文化・ケアを斬り結ぶ社会学的考察』は、「ミュージッキング」や「パフォーマティヴィティ（行為遂行性）」という、近年文化社会学や文化研究、音楽学で用いられているが文化理論を基にしながら、音楽実践の参与観察を行い、「いま音楽に何ができるのか」という大きな問題に取り組んだ野心的な論文である。全体は三部構成で、第一部がイントロダクション（第1章）と先行研究レビュー（第2章）、第二部が二つの事例〔セクシュアル・マイノリティの音楽フェスティバル「Prelude」（第3章）とクラブイベント「Living Together Lounge」（第4章）〕の検証とその考察（第5章）、第三部が補論（第6章）と全体の結論（第7章）から成る。

本論文の成果は大きく次の三点に集約することができる。

- (1) 「ミュージッキング」や「パフォーマティヴィティ」という概念に着目することで、従来の音楽実践の概念を拡張するとともに、「音楽」に対する新しい認識方法を示したこと。特に「ものとしての音楽」だけでなく「こととしての音楽」という動的で開かれた音楽実践を研究対象として取り上げることで、「音楽」が持っている新しい社会的・政治的な可能性を提案している。
- (2) その研究が、具体的な音楽実践のフィールドワークに支えられ、具体性と説得力をもった議論として展開されていること。ほとんど紹介されることのない文化実践の厚い記述は、同時代の音楽と政治、アイデンティティの問題を考えるための、貴重なドキュメンテーションとして読むことができる。
- (3) 事例研究が単なる最新の理論の応用に留まらず、具体例の検証から「ミュージッキング」や「パフォーマティヴィティ」を実践的で動的な概念、実践者たちエンパワーメントのためのツールとして定義しなおすことで、その理論的枠組みを批判的に更新していること。

論文そのものが、「パフォーマティヴ」に記述されているために、ところどころ詩的な表現や厳密な定義を欠く面も見られたが、口頭試問の際にこうした審査員の疑問に対する十分な回答が得られた。

本論文は、文化社会学、文化研究、ジェンダー／セクシュアリティ研究に新しい知見と方法論をもたらすものとして高く評価できる。以上をもって、博士号に相応しい優れた論文と判断したい。